

三十二文字のパレット

みそひともし

俵万智



中公文庫

みそひともし
三十一文字のパレット

定価はカバーに表示してあります。

1998年4月3日印刷

1998年4月18日発行

著者 たわら まち
俵 万智

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Machi Tawara

本文印刷 大日本印刷 カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 大日本印刷

ISBN4-12-203111-7 C1192

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

み そ ひ と も じ
三十一文字のパレット

俵 万 智



三十一文字の
パレット
目次

1	白の寂しさ	11
2	夕暮れの赤	14
3	未知としての青	17
4	中年と金色	20
5	少女の色	23
6	透明を感じる心	26
7	白プラス紅	29
8	書き込みの朱	32
9	二色使いの歌	35
10	あかあかと曼珠沙華	38
11	黄のばら	41
12	ガラスの不思議	44
13	夢色のポケット	47

14	降ってくる雪	50
15	ほんとうの自分	53
16	新婚の歌	56
17	無言の言葉	59
18	電車の中	62
19	言葉の色	65
20	離婚の歌	68
21	絵のある歌	71
22	手紙の歌 (一)	74
23	心が言葉になる時	77
24	男の口づけ	80
25	自己嫌悪の歌	83
26	玩具の歌	86

27	宙ぶらりんのものの歌
28	気になる言葉
29	相反する思い
30	ふとした違和感
31	手紙の歌(二)
32	政治とのかかわり
33	数字の重み
34	年の階段
35	空気の中に
36	独楽
37	夫と妻
38	ヘッドホン・ステレオ
39	時計いろいろ

89	92	95	98	101	104	107	110	113	116	119	122	125
----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40
伝言板のドラマ	漢字の発見	東京のビル	女が見る女	さまざまな乳房	植物の時間	鞆の歌	家族の変化	少年の歌	手と手の物語	花の終わり	折り紙の歌	おさなごの歌

164	161	158	155	152	149	146	143	140	137	134	131	128
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

	53	花のない花瓶	167
	54	エレベーターの中で	170
	55	子どもの目	173
	56	立場の逆転	176
	57	農作業の歌	179
	58	恋は錯覚	182
	59	浮かびあがる文字	185
	60	男親の歌	188
	61	文法用語と歌心	191
あとがき			194

三^み十^そ一^{ひと}文^も字^じの
パ
レ
ッ
ト

1 白の寂しさ

「白」に象徴される寂しさは、ブルーやグレーや黒と違って、しめり気のない寂しさのよ
うな気がする。暗さのない寂しさ、と言ってもいい。

梨をむくペティ・ナイフしろし沈黙のちがひたのしく夫とわれとある つま 松平盟子

一つの果実を、夫婦が分けあって食べる風景は、平和そのものだ。が、時間と場所は共
有されても、心は決して共有されていないことを、この歌はうたっている。会話が噛みあ
わないのではない。相手が不在なのでもない。そばにいて、平和な夫婦を演じながらも、
別々の沈黙を身にまといっている。そのことを、「せつなく」でも「むなしく」でも「悲し
く」でもなく、「たのしく」と言っているのけたあとの、カラリとした寂しさ。ペティ・ナイ

フの白がそれを受けとめている。二人の沈黙の隙間をうずめるように、皮をむかれてだんだん露わになる梨の肌も、また白である。

娶るとはさびしからむに君はいま白きシャツなどひらひらと着る

まつみひろこ
松実啓子

娶ることの寂しさに気づいていない寂しさが、シャツの白さなのだと思う。パステルカラーやチェックのシャツでは、この感じは出せないだろう。ぬくもりも、しめり気もない白。反対に「娶る」という語は、どこか生あたたかく、しめっぽい。そのことに対するかすかな嫌悪とほのかな苛立ちとが、この歌を生んだ。

結婚や妊娠・出産という、ともすれば女の視点べったりになりがちなテーマを、松実啓子はちよつと不思議な視線で捉える。男から離れているのと同じぐらい、女からも離れているのである。女であること、妻になること、そして母になることへの違和感。本来の自分との「ズレ」の感覚が、歌を作るエネルギーなのだ。

あっけらかんと妊りにけり愚かしきこの肉叢は陽にさらしおく

この「陽」の白さもまた、しめり気のない、暗さのない、どこかぼかんとした寂しさだろろう。

その名も『びあんか』（イタリア語で「白の女」の意）という歌集が、昨年（一九八九年）出版された。作者の水原紫苑もまた、白の寂しさをあらためて思わせる存在だ。

喉白く五月のさより食みゐるはわれをこの世に送りし器

一首のポイントは、まず「喉白く」であろう。自分とは切り離された存在として母を捉える視線である。そしてさよりの白が喉の白に吸いこまれてゆくとき、「器」という乾いた言葉が選ばれた。

血の赤に象徴されるような、あるいは闇の黒につながるような、母娘関係ではない。白の女は、白で表現する。闇ではなく光を含んだ寂しさである。

2 夕暮れの赤

万葉集から現代に至るまでの短歌を、朝の歌、昼の歌……というふうに時間帯別に分けてみるとどうなるだろうか。なんとなく夕暮れの歌というのが多いような気がする。「三^{さん}夕^{せき}の歌」をはじめ、夕暮れは数々の名歌を生み出してきた。だから逆に、現代にあつて夕暮れの歌をうたうことはむずかしい。しみじみとした気分^{きぶん}に流されてしまふ^まう^う恐^{おそ}さがそこにはある。

スカーフの赤も暮色に鎮まれば二人の舟を岸に漕ぎ寄す

栗木京子

しみじみとしていながら流されず、この一首がしつかり岸に着くことができたのは、「スカーフの赤」が生きているからだろう。恋人同士が向き合いながらボートの上で語ら

う。その時間の高揚した気分を象徴するような赤いスカーフ。やがて時は過ぎ、日は陰り、ひんやりとした風が吹きはじめる。「鎮まれば」という言葉によって、赤という色彩が鮮やかさだけではなく、熱をも奪われてゆく感じが、巧みに表現された。そして二人の恋の時間の鮮やかさと熱も、同時に鎮まってゆくのである。

それにしても誰もが感じてしまう、夕暮れのあの「しみじみ」は何なのだろう。センチメンタルなもの思いへの誘惑。からめとられる前に、先手を打ってそのセンチメンタルを主題にしまった歌人が、村木道彦ではないかと思う。

たそがれにひとひたすらにあゆむとき朱なる色素をバラというなり

上の句が全部ひらがなで書かれているのは、やや幼児性を帯びた、自己陶酔的な「あゆみ」であるためだろう。ひとを包むたそがれの空気の中から抽出された色素は「朱」。作者はそれをバラと名づけた。「ばら色」という言い方には、どこか安易な明るさがある。「薔薇」という花には犯しがたい美しさがある。その両方の意味をこめての「バラ」であろう。歌集『天啓』^{てんしん}では、右の歌に続いて次の二首がある。

おぼろおぼろひざしはあわしくれがたを 転落ということばありけり